講演録

粘土板記録システムの成立と伝播

前川和也

Invention and Diffusion of the Sumerian Writing System

Kazuya MAEKAWA

I

京都大学人文科学研究所の前川です。本日は日本西アジア考古学会にお招きいただいて、ありがとうございます。先ほどの三笠宮殿下のスピーチは「なによりも現場に立ってみないとだめだ」ということでありましたけれども、じつは私、まだイラクに行ったことがありません。そのような、いわばアームチェアにすわって粘土板テキストや文献を扱っているものがこの問題を議論すると、いったいどういうことになるのか。ぜひとも、メソポタミアの現場でお仕事をなさっていらっしゃる方々からのご批判をいただきたく思います。本日は、初期メソポタミア時代、つまり前4千年紀末いわゆる「アルカイック・テキスト」(古拙文書)が成立した時期から、古バビロニア時代が終わるまで(前2千年紀中葉)の時期において、「粘土板記録システム」が各地でどのように受容されていたか、ということをお話ししたいと思います。

さっそく脱線させてください。まずひとつは、いまから20数年前でしょうか、私がシカゴ大学オリエント研究所に滞在していたときのことです。ある日ホテルで新聞を読んでおりました。中国で文化大革命が終わった後のことだったのですが、その日の新聞には「上海四人組」が逮捕されたという大記事が載っておりました。ところが、新聞をいくら読んでも、どなたが逮捕されたのか、完全には分からない。1人については、the widow of Mr. Mao というコメントがあるから江青さんのことだというのは見当がつきます。けれどもあとの3人は、いったいどなたが捕まったのか、結局彼らの名前がイメージできませんでした。名前が漢字で書いてあればその漢字を「読める」のだけれども、中国語が音としてアルファベットで表記されていると、私にはお手上げだったのです。

ちょうどその日、言語学のI.J. ゲルプ(Gelb)さんとシュメール学者M. シヴィル(Civil)さんと3人で昼食をとりました。その場で私が「上海四人組」の新聞記事の話をしたのです。日本人は「江青」を中国起源の日本音で読んではいても、その正確な中国語発音については、専門家以外はよく知らない。そのかわり、この人名が川は青い、きれいだ、といった意味だということはだれにでも分かるといったことをしゃべりました。するとシヴィルさんは、私が話したとまさに同じような現象がエブラでもおこっていたはずだとおっしゃいました。その頃シヴィルさんは、前3千年紀後半のエブラで出土した粘土板についての論文を準備していたのです。エブラでは、シュメール語彙、スメログラムを大量に用いて文章を書き、意味を伝達する。けれども、それらをどういうふうに読むかは、読み手に任せておくというのです。シュメール語彙だってシュメール語風に読んだかどうかは、じっさいには分からない。そしてその直後、シヴィルさんはエブラのシュメール語にかんする論文を公刊しました。それはあるシンポジウムでの発表論文なのですが、その冒頭で、シヴィルさんは数ページにわたって、飛鳥時代、奈良時代初期の日本語表現、たとえば万葉仮名や漢語の使用法といったことを書きこんでいます。「ひらがな」や「カタカナ」が発明される以前に、日本人が漢字をどういうふうに使って、いかに苦心惨憺して日本語を表現しようとしたのか、われわれはよく知っていることなのですけれども、ほとんど同じような状況がエブラでもおこっていたというのです。

もうひとつのエピソードです。ほぼ同じ頃、エッソ・スタンダード石油が作っていた雑誌『エナジー』が「漢字文明」という特集を組んだことがあります。その特集のために、人文科学研究所のスタッフだった社会人類学の梅棹忠夫さん、中国古代史の川勝義雄さん、文化史・文化人類学の谷泰さん、そして私の4人で座談会をもちました。座談会の発言でいまも記憶にのこっていることがあります。そのとき、終始一貫して梅棹さんは、漢字が中国文明のイメージ記号なのだということを強調しておられた。つまり、漢字を読む、用いるということは、中国文明そのものと対決するということなのだと。さきほどのエピソードの「江青」という名前についていえば、「江」あるいは「青」という漢字にこめられた意味、イメージというものと、どうしてもぶつからざるを得ないということですね。ですから梅棹さんは、漢字がニュートラルに伝播していくということなど、いったいありえたのか、ということもおっしゃっておられた。アルファベットの普及の態様と比べてみてください。もうひとつは、梅棹さんの発明なのかどうか、よく知りませんが、彼は座談会のなかで擬似(プソイド)漢字という言葉をさかんに使われました。西夏文字、契丹文字などを指しています。擬似漢字は、結局は漢字に敗北してしまう

西アジア考古学 第3号 2002年 141-149頁
©日本西アジア考古学会

というのですね。たとえば、ひらがな、カタカナ、ハングルを作るなり、要するに梅棹さんは、漢字とはある一定の距離を保った文字体系を作らないと、最終的には漢字文明にのみこまれてしまうという議論をしたのです。

これは、楔形文字の世界を考えるうえでも、たいへんおもしろい問題提起です。たとえば、原エラム文字を、擬似漢字と同じように捉えてみたらどうだろう。原エラム文字は、はやくに消えてしまいます。さて、ただひとつ、「漢字文明」は、われわれの「楔形文字文明」、「粘土板文字文明」より具体的には「シュメール文字文明」といっしょに議論できないところがあると思う。梅棹さんは、漢字というのは本当にニュートラルな意味で広がっていけるのだろうか、漢字を使えばかならず漢字が持つイメージとぶつからざるを得ないというふうにおっしゃったのだけれども、われわれの楔形文字、シュメール文字は、かなりニュートラルに伝わっていけたのではないだろうか。これは、今日の話の結論でもあります。もうお分かりのことと思いますが、シュメールの楔形文字テキストは行政・経済文書として出発した、そして文字は、当初は主としてイデオグラムであった。さらに膠着語をあやつるシュメール人がそれを用いた。この3点が、シュメール文字を大変早く各地に伝播させていく大きな要因であったと考えてみたい。漢字の普及とは、そこで決定的にちがうように思われるのです。例をひとつあげます。前3千年紀末のシュメール語では、ロバのことを anše ともうします。アッカド語では *imēru* です。けれども、アッカド人が行政文書などでロバを言い表わすとき、*i-me-ru* と3サインで表記するよりは、ANŠE とだけ1スメログラムで記しておいたほうが、はるかに楽ではありませんか。もちろん、この ANŠE サインを用いれば、*i-me-ri* などと変化させて書く必要もない。そもそも、サインをシュメール語として anše と読むのか、アッカド語風に読むのかも、読み手に任せておけばよい。ただしアッカド人書記は、ANŠE というかなり複雑なサインを書く練習を、それこそ必死で行なったでしょう。そして行政文書は、本質的にドライな内容のものです。「青」という漢字にこめた中国人の美的イメージと対峙するといった問題とは別の次元で、アッカド人はスメログラム ANŠE を彼らの行政・経済文書に用いることができたはずです。シュメールの文字体系がかなりニュートラルに伝播していけたというのは、そのような意味においてなのです。

II

楔形文字の記録システムは、メソポタミアの最南部ウルクにおいて成立いたします。ウルク期の最後の段階であるエアンナIV a 層から最古のテキストが出土いたします。ウルクIV a 層とつぎのIII層（ジャムダト・ナスル期に対応）から出土した数千枚にわたる文書は、しばしば「アルカイック・テキスト」とよばれますが、じつはアルカイックと定義するには問題が多い。このことは、あとでお話しできると思います。

最初に注意しておくべきことがあります。それはいわゆる「トークン・システム」との関係です。あとひとつは、「ウルク世界システム」論との関係であります。まず「トークン・システム」にかんしては、「コンプレックス・トークン」が成立する、いわゆるブラ（中空の粘土ボール）のなかにトークンが入れられる、そしてその後、ブラよりもむしろ平板なタブレットのうえに数字トークンが押しつけられる、これが粘土板記録の先駆的な形態なのだと D. シュマント・ベセラ (Schmandt-Besserat) さんが主張されたことは、すでにご承知かと思います。もちろん彼女は、それ以前の「プレーン・トークン」が「勘定」、「計量」の原点なのだとも言っておりますが、ここではその問題には立ちいりません。私は、「コンプレックス・トークン」や「数字タブレット numerical tablet」(粘土板のうえにトークンが押されているのか、それともスティルスの先端が押しつけられているのかはじつは大問題なのですが、ベセラさんは前者だと考え、これを「(トークン)押印タブレット impressed tablet」とよびかえました) 成立の重要性を否定するつもりはありません。けれどもベセラさんのように、ウルクIV a 層の粘土板記録の起源をすべてこれらに求めるのは、やはりまちがっています。彼女のいうように、絵文字がコンプレックス・トークンに似せて作られたというのも、たぶんにあやしい。また絵文字サインの数は1000をはるかに超えます。トークン起源論ではとうてい説明できない数なのです。

さてシュマント・ベセラさんは、シリア地方、スサなどでも発見されるブラは、税をウルクに納入するために用いられたとも述べています。もしこの発言をアルガゼさんが知っていたら、彼の「ウルク世界システム」論はどう変わっていたでしょうか。あるいは変わらなかったでしょうか(なおベセラさんの考えは、とうてい証明不可能です)。アルガゼさんの議論については、明日討論が行なわれるはずです。また彼の論拠となった個々の考古学的事物については、私には論じる資格がありません。けれども、私は、「世界システム」という語は、やはり使わないほうがよいと思います。彼が以前の論文タイトルに用いた表現「ウルクの拡大」のほうが、はるかに穏健で、しかもよくできている。「世界システム」を最初に用いた I. ウォーラーステイン (Wallerstein) は、ヨーロッパ近代以前にかんしては、「帝国」を想定しているのですし、またこれには「中心」、「核」と「周辺」という概念が不可避的に含まれます。そこに大修正を加えながらもその語を用いつづける、そうすれば、まちがいな

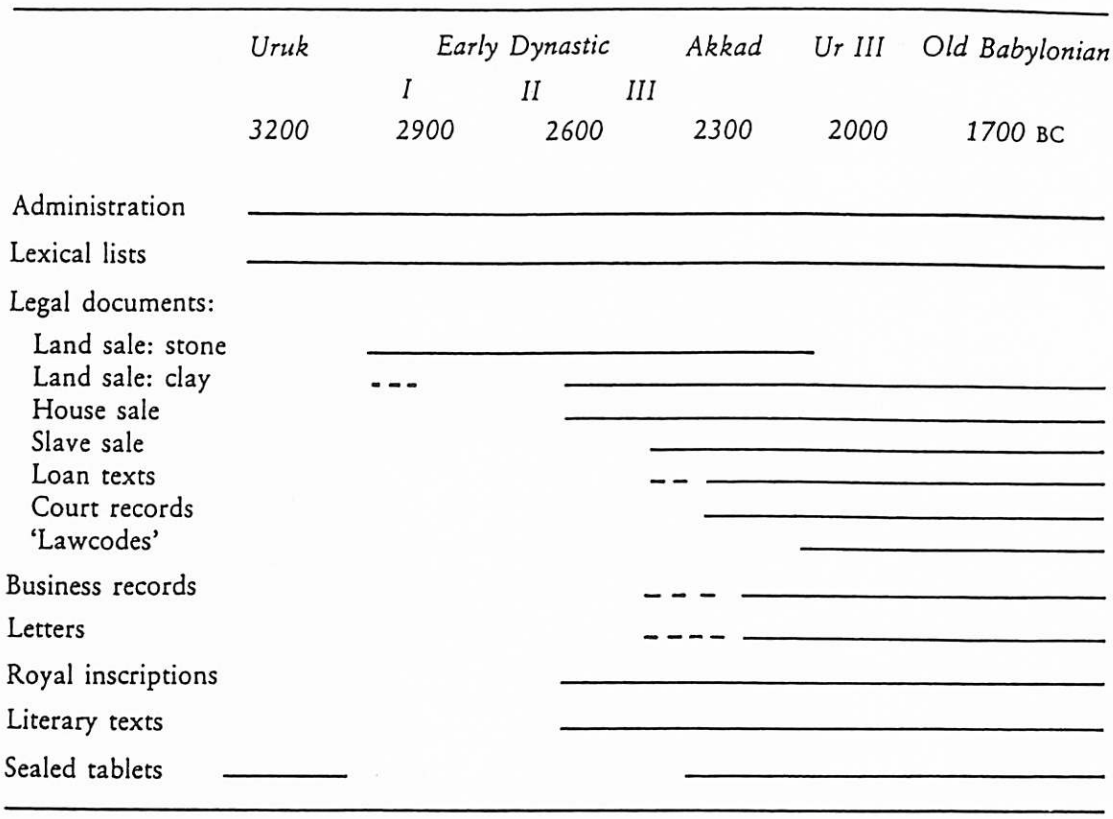

図1　初期メソポタミアの文字記録ジャンル

く無用の混乱がおこる。そうした使い方ならば止めた方がよいと私は考えます。

それよりも注意しておいていただきたいことは、「ウルク世界システム」あるいは「ウルクの拡大」の中心となる時期が終わったのちに、ウルクで粘土板記録システムが成立したという事実です。つまり、「拡大」の時期に粘土板システムができたのではない。「拡大」、この時期に私はハブーバ・カビーラ南にみられるような大規模なシュメール植民運動があったと考えたい誘惑にかられますが、それが終わったのちに(「縮小」とよべるのでしょうか)、「コンプレックス・トークン」や「数字テキスト」とはちがうシステムの文字記録が生まれたのです。粘土板記録システムは、長距離交易の必要などの関係で生まれたものでは、絶対にない。これは、大規模な公共組織を管理・運営するために生まれたのです。

シュメールの粘土板記録システムは、公共組織のマネジメントのために成立した。この公共組織が「神殿」であったかどうかは、まだ分かりません。そして、たとえ問題の粘土板群がウルク・エアンナ聖域地区の「神殿」経営文書であるとしても、そのようなものを生みだした究極の力が、「神殿」の内部にあったといえるかどうか、それについて結論を得るには、まだまだ時間が必要だろうと思います。私はむしろ、ウルクIV a 層やIII層の時代に世俗的な権力を考えたい。ライオン狩りを行なっている人物を描いた浮彫りが出土していますが、私はこの人物に世俗的な力を持たせたいのです。「ウルクの大杯」に描かれていたはずの人物が支配者だったとは、思えません。ただ、今日は、この問題にはこれ以上深入りはできません。

レジュメを見てください(図1)。これはポストゲイトさんの書物から借用いたしました(Postgate, J.N. 1992 *Early Mesopotamia : Society and Economy at the Dawn of History*, 66 [Figure 3 : 13])。これは、初期メソポタミア時代にどのような粘土板記録が作られたかということをうまく表にしてあります。まず、ウルクで生まれた最初の粘土板の圧倒的多数が行政・経済文書であること、そして行政・経済文書はその後もメソポタミアで書かれつづけるということが分かります。ただし誤解していただきたくないのですが、行政・経済文書が、どの時代のどの遺跡からも多数出土しているというわけではないのです。文書がまったく発見できない時代も、遺跡も多いのです。たとえばウルクからは、いわゆる「古拙文書」の時代以降、前3千年紀、前2千年紀の粘土板は、ほとんど見つかっておりません。つぎに注意していただきたいのは、ウルクIV a 層、III層から「レキシカル・リスト」すなわち辞書的な語彙リストがすでに出土しているという事実です。8割以上

が「行政・経済文書」であって、のこりが「語彙リスト」です。なおポストゲイトさんの表は、いわゆる「古拙文書」の時代を「ウルク」という語だけで説明しているけれども、やはりこれは、ウルクIVaおよびIII層の時期、あるいはウルク後期の最後の段階およびジャムダト・ナスル期だと書いておくべきでした。われわれは、III層（ジャムダト・ナスル期）の粘土板の精密さに本当に驚嘆します。文字体はともかくとして、この時期の粘土板の内容を指すのには、アルカイックという語は、けっしてふさわしくない。そしてテキストに記されている大組織の管理・運営の複雑さは、のちの時代のそれとあまり変わりないのかもしれない。

M. パウエル（Powell）さんが推定するように、ウルクIVa層の時代に、ある個人が、ごく短期間のうちに文字体系を考えだしたのかもしれません。それくらい急速に成立したのだと思う。「コンプレックス・トークン」や「ブラ」とは、ほとんど関係なく、粘土板記録システムが発明されたのだと思います。そしてそのシステムは、つぎのIII層、ジャムダト・ナスル時代にいたって見事に整えられる。

言い方を変えましょう。ウルクの大公共組織は、粘土板記録システムが発明されるのをいわば「待っていた」のです。もはや大公共組織は、粘土板による記録なしでは運営が不可能なほどに、大規模化、複雑化していたはずです。話題はおおきく飛躍しますが、私には、16世紀中葉、日本の戦国大名たちは、種子島に鉄砲が到来するのを「待っていた」ように思えます。それは政治・社会の激変と新しい技術の導入とが完璧にむすびついた例なのですが、前4千年紀から3千年紀にかけての南部メソポタミアの社会発展と粘土板記録の発明も、同じように考えることができるのではないでしょうか。かつてチャイルドは文明の成立にかんして文字記録の発明ということを強調したけれども、その観点はけっして誤まっていない。ただし、どのような種類の要求があって文字体系が生まれるのかは、文明によってさまざまです。メソポタミアではそれは、大組織の日常的運営への必要性でありました。漢字はまったく異なる要請のもとで成立しました。ふたつの文字体系は成立事情におおきなちがいがあって、そのためにそれらがかなり異なった態様で伝播していくことになったのです。

III

ウルク・エアンナ聖域地区では、IV層とIII層とのあいだには考古学、建築の点ではおおきな断絶があるといいます。にもかからわずIII層から出土する粘土板は、以前の粘土板とはまったく断絶なく、さらにそれらを大発展させていきます。ウルクIII層の時期つまりジャムダト・ナスル期は、粘土板記録システムの発展にとっては、たいへんに重要な位置を占めます。それにはふたつ理由があります。まず、この時期に文字記録法が各段に進歩していくと同時に、いわゆるレキシカル・リストの種類、数もたいへん増えます。あとひとつは、この時期に粘土板記録システムがメソポタミア各地に伝播していったという事実です。後者については、ジャムダト・ナスル遺跡から出土したテキスト群をみればよい。ジャムダト・ナスルはキシュのすぐ近く、シュメールでなくアッカド地方のほぼ中心に位置します。しかも文字体も、文書の内容も、南部ウルクの同時代テキストのそれとほとんど変わりません。そして隣接するディヤラ地方では、いまのところこの時期の粘土板はごくわずかしか出土していないのですが、将来多数の発見があってもまったく不思議ではない。もちろんキシュでも、この時期の粘土板が大量に発見されても当然でありましょう。それには理由があります。もういちどポストゲイトさんの表をご覧いただきたいのです。行政記録、語彙集につづいて彼は、法的記録（legal documents）を挙げています。初期の法的記録というのは、不動産の売買記録のことです。もっとも最初のテキストは、粘土板ではなく石に彫り込まれています。初期王朝期I期と位置づけられられているけれども、年代的にもっとさかのぼる可能性がある。そして重要なことは、初期の土地売買テキストはシッパルなど北部でみつかっているのです。初期メソポタミア時代では、一貫して南部よりも北部で土地売買が盛んでありました。つまりジャムダト・ナスル期には、南部では、大組織の日常的な管理運営のためにテキストが必要であったのです。北部でもおなじような組織とテキストとがジャムダト・ナスルで見つかっている。そして北部では、土地売買の記録もこの時期にさかのぼるかもしれない。そしてこのことは、さらにもうひとつの問題とかかわってきます。

かつてゲルプさんが「キシュ文明」という概念を提出したことがあります。シュメールの粘土板記録システムがシリアのエブラにまで伝播するにあたって、キシュが決定的に重要な役割をはたしたというのです。この考えは、最近シュタインケラーさんによってさらに深く議論されました（Steinkeller, P. 1993 Early political development and the origins of the Sargonic empire. In M. Liverani (ed.), *Akkad : The First Empire*, 107-129）。シュタインケラーさんは、「ウルクの拡大」（彼も「ウルク世界システム」という語を用いません）には前史があるというのです。「ウルクの拡大」Uruk Expansionというのであれば、「ウバイドの拡大」Ubaid Expansionをも考えるべきだという。そして「ウバイドの拡大」、「ウルクの拡大」のあとをキシュ王朝が、さらにそのあとをアッカド王朝がひきうける。これがシュタインケラーさんの図式なのです。「ウバイドの拡大」の時期から、シュメール人がディヤラ地方にまで進出

する。そしてその後、ディヤラ地方、北部バビロニア、そしてそれに西接する地域にアッカド人が定着し、大きな政治的、文化的世界を作りあげる。これが結実するのが、いわゆるキシュ第1王朝です．そしてその後も、この地域は政治的に統一されていた。南部のシュメール都市国家群にたいして、北部ではキシュを中心とする領域国家が存続したというのです。シュタインケラーさんによれば、マリは、いわばキシュの出店として成立した。そして北部にこのような政治的統一があったからこそ、サルゴンのアッカド王朝が容易に成立できたというのです。また、このような領域国家が存続しているから、粘土板文化は容易に西方へ伝播していくということになる。

これはなかなかチャーミングな考えですが、すべてが実証されたわけではありません。またシュタインケラーさんは、バビロニア南部のシュメールと北部アッカドのちがいを強調しすぎるきらいがある。ここでは「キシュ王朝」についてはこれ以上深入りはしませんが、政治的な統一体がなくても粘土板記録システムが伝播できることだけは、確認しておかなければなりません。それほど粘土板はニュートラルな存在なのです。もちろん政治的な統一世界があれば、各地で画一的な粘土板記録システムがじつに容易に採用されます。

Ⅳ

これらのことをもっとも見事に証明するのが、いわゆる語彙リストの伝播であります。ウルク出土「古拙文書」の約2割近くが「レキシカル・リスト」すなわち語彙集だともうしました。これらには職業であるとか、あるいは容器、地名といった、ある同一のジャンル、カテゴリーに属する名詞が列挙されているのです。前2千年紀の辞書（レキシカル・テキスト）のように、バイリンガルではもちろんない。けれどもレキシカルといった性格をもっていることは疑いなく、レキシカル・リストという呼称は適切です。さて、この種のテキストの一部はウルクⅣa層から出土してはいるのですが、レキシカル・リスト全体としてはⅢ層の時代になって大発展をとげました。そしてこれらのリストは、前2千年紀はじめまでウルク以外の各地でも書きつづけられているのです。どの語彙リストがどの遺跡から出土しているかについては、最近エングルンドさんが大変便利な表を作ってくださっているので、それを参照してください（Englund, R.K. 1998 Texts from the Late Uruk period. In J. Bauer et al., *Mesopotamien : Späruruk-Zeit und Frühdynastische Zeit* 88-89 [Fig. 24]）。この表をみれば、われわれが知っているリストの大部分が、すでにウルクⅣa層とⅢ層から出土していることが理解できます。なおこれらは、古バビロニア時代以降にまでは伝わっていかない。地理的には西はシリアのエブラ、東はスサまで、北はキルクク近くのヌジまで、テキストが伝播しています。エブラ出土テキストは、ほぼ初期王朝期の終わりですけれども、スサやヌジのテキストはアッカド時代に成立しています。

語彙集のなかでもっとも有名なものは、Early Dynastic Lu Aと便宜上よばれているテキスト群です。古バビロニア時代のバイリンガルな辞書テキストに、LU_2（シュメール語で「人」を意味する）をはじめとしたシュメール諸語が列挙され、そしてそれらのアッカド語訳が付されているものがある。LU_2ではじまるテキストには、官職、職業あるいは人の属性、つまり人間にかんするあらゆる記述が集められているのです。そして、そのような前2千年紀の辞書テキストの前身ともみえるようなテキストが、さらに古い時代に書かれていて、われわれはそれらをEarly Dynastic Luとよんでいるのです。ただし、後に触れるように、前2千年紀の辞書テキストと3千年紀のEarly Dynastic Luとのあいだには、じつは系譜関係は存在しないのです。さて、Early Dynastic LuにはAからEまでの諸テキストがのこっています。そのなかでもっとも有名なテキストはEarly Dynastic Lu Aです。お手もとの資料に、各地で出土したEarly Dynastic Lu A粘土板のコピーをのせておきました（図2、3［ただしここでは、講演者の了解のもと、当日配布された資料は掲載しない］）。

図2のNo. 1（W 17942）はウルクⅣa層、No. 2（W 20266、1）はⅢ層出土テキストです。これ以外にもウルクから数おおくのLu Aリストが発見されています。その大部分がⅢ層時代に成立しました。これらはどのような目的で書かれたのか。ひとつには書記のトレーニングのために教科書として作成された、また、ひとつの官職を表現するにあたって、書記たちが異なった文字記号を書くことを防ぐために、ガイドとしてリストが作成されたと考えることが可能です。No. 3からNo. 7まではウル出土の古拙文書です（UET 2 299, 300, 14, 264, 301）。おそらく初期王朝期Ⅰ期のおわり、あるいはⅡ期のはじめに位置づけられるでしょう。No. 8はシュメール北部ファラ（遺跡名シュルパク）から出土しました（SF 75）。No. 9もファラ出土です（SF 76）。円形の粘土板であることに注意してください。これは書記学校生の練習用テキストです。No. 10はファラから遠くないアブ・サラビク（古代名ケシュ？）出土です（IAS 2）。おそらくNos. 7、8、9、10は初期王朝期Ⅲa期に成立しました。図3のNo. 1（MEE 3 1）はシリアのエブラ（テル・マルディク）出土です。エブラ・テキストの年代は、かつてはアッカド時代とみなされることがおおかったのですけれども、現在は初期王朝期Ⅲb期に引き上げられるようになりました。No. 2（DP 337）は、ほぼ同

じ時期のメソポタミア南部ギルス（＝ラガシュ、遺跡名テロ）出土です。円形粘土板の表と裏に、それぞれ2官職名が書かれています。まちがいなく、これは書記学校生徒の練習テキストです。第1のサインは、Early Dynastic Lu Aリストの第1行にあらわれる官職名です。このサインがどういう意味をもつのかについては、ベルリンのH.J.ニッセン（Nissen）さんの重大な結論があります。彼は、ウルクIV a、III層の時代には、この職名が支配者を意味していたというのです。つまり支配者は、よく説かれているようにエンでも、ルガルでもなかったというのです。のちの、ある辞書テキストでこの職名がアッカド語で*šarru*（「王」）と説明されているからなのです。ただしこの考えも、まだまだ慎重に取り扱ったほうがよい。なによりも問題の辞書テキストでは、Early Dynastic Lu A冒頭の職名のみならず多数の語が*šarru*と一括されているからです。なお、後の時代の書記たちにとっては、Early Dynastic Lu Aの職名のおおくは、意味が分からなかったにちがいない。この冒頭の職名もその可能性がある。にもかかわらず生徒たちは職名を構成するサインを変えることなく、また職名の順番を変えることなく、官職表をコピーしつづけました。それを象徴的に示すのがNo. 2であります。No. 4（YOS 1 12）はニップル出土、プリズムであって粘土板ではありません。おそらくこれはアッカド時代に成立している。ほぼ同じようなEarly Dynastic Lu Aプリズムがギルス＝ラガシュでも出土しているらしい(前川未見)。アッカド王朝のもとで画期的な行政システムが各地で採用されました。つまりすべての地域で同じスタイルで同じような行政文書を作成する必要に迫られたのです。そのためにも官職語彙リストも必要だったのでしょう。もちろん政治的な統一がなくても語彙リストは各地に伝播していける。けれども政治的な統一体のもとでは、伝播はますます容易になる。それを示唆するのはNo. 3 (MDP 14 88)です。まちがいなくこれは、イランのスサから出土したEarly Dynastic Lu 断片であります。アッカド期、そしてつづくウル第3王朝時代、スサがメソポタミアの強い影響のもとにおかれていたことは、よく知られています。さて、われわれが知っているEarly Dynastic Lu Aのうちもっとも新しいものとして前2千年紀はじめのニップル出土の2テキストをあげておきます (No. 5 [SLT 112]、, 6 [SLT 113])。なおNos. 5、6は官職名リストだけで成立しているのでなく、同時にテキストにはシュメール語の個人名も集められているのです。行政・経済文書を作成するために書記は、職名とともに人名をも勉強しておく必要があった。これら2ジャンルのテキストが合体したことは、納得のいくことでありました。あとひとつ重要なことがあります。Nos. 5、6が成立したとほぼ同じ時期に、これらとはまったく系列を異にするテキスト、いわゆるLu_2辞書テキストがニップルでもさかんに書かれていたという事実であります。そしてこのテキストが、のち西アジア各地に伝播していくことになる。もちろんひとりの書記、あるいは書記の卵がいっぽうでEarly Dynastic Lu A語彙リストを、他方でLu_2辞書テキストを勉強することがあったのかどうか、それはまだ分かりません。

あとひとつ官職語彙リストの例をあげておきます（図4［ここでは掲載しない］)。Early Dynastic Lu Eとよばれているテキスト群です。これは、シュメール南部ウルクでは出土していないリストであります。ウルクIV a、III層時代でなく、はるか後になって成立したとみなしてよいでしょう。図4のNo. 1（IAS 60）がアブ・サラビク出土リストです。No. 2 (HSS 10 222) は大変に重要です。これは北部イラク、キルクク近くのヌジ（ヨルガン・テペ）で、アッカド時代の層から発見されました。このセトゥルメントはアッカド時代になって急激に発展したようで、アッカド時代にはガスルとよばれていたことが分かっています。ここから、シュメール語専門術語を大量に用いたアッカド期の行政記録が多数出土していることに注意してください。またNo. 3（MAD 5 35）は、ほとんど同じ時代のキシュ出土テキスト断片であります。このようにEarly Dynastic Lu Eは、Early Dynastic Lu Aに比べてかなりのちになって成立し、南部地方というより北部地方で普及していたのかもしれない。なおいまのところ、エブラではEarly Dynastic Lu Eは発見されていない。出土しても不思議ではないと思いますが、見つかっていない。

V

このように見てくると、官職表やその他の語彙リスト(レキシカル・リスト）がウルクで最初に作られ、そして各地に伝播していく、またある種のリストはその刺激を受けてウルク以外で成立する．そのような過程にはいくつかの波があったと考えることができます。最初の波はまちがいなくウルクIII層の時代（ジャムダト・ナスル時代）に発生しています。初期王朝期の後半やアッカド時代にもそのような波があったのでしょう。すでに触れたように、シュタインケラーさんは、主として前3千年紀前半から中葉にかけてバビロニア北部のキシュを中心とした強大な領域国家が存続したと考えています。シュタインケラーさんは、ゲルプさんと同じく、この時期に粘土板記録システムがエブラにまで伝わっていったと考えているようです。いくども繰りかえしますが、政治的な統一体があれば粘土板記録システムはもっとも容易に普及していきます。けれども、そのような政治的一体性がなくても、各地の独立都市国家に

とって行政を記録する体制は必要です。前3千年紀後半のエブラのテキストを見てください。エブラの政治制度は南部メソポタミアの都市国家のそれとは、たいへんに異なっていたようですが、文書による行政・管理が必要であったことは、まったく同じです。そのさいに要求されたことは、スメログラムによる行政専門術語を多用すること、シュメール人と同じ文字体を書くこと、そしてエブラのセム語人名をなんとか表記することでありました。これは、飛鳥、奈良時代の日本とほとんど同じではありませんか。わが国では、中国から博士を招いて必死で中国語、漢語を書くための研鑽を積む。同時に万葉仮名として漢字を用いなければならない。また官庁の書記たちは、木簡に行政処理の記録を書きのこしました。

政治的統一があれば、広大な地域のなかでも行政文書のスタイルはほぼ共通してくる。図5を見ていただきます(図5もここでは掲載していない)。ここには、アッカド期に各地で書かれた耕地測量テキストをランダムに集めて並べておきました（Nos. 1-11 [HSS 10 27, BIN 8 147, RTC 142, 141, PUL 24, 26, 27, 28, 29, BIN 8 160, ASJ 4 141)。帝国各地でいかに同じような文書が作成されていたかがお分かりのことと思います。文書にあらわれる専門用語も、地域によって極端なちがいはない。ただしこれらにみえる専門術語がすべてシュメール語で読まれたかどうかは、よく分からない。シュメール語で読まれたケース以外に、現地語で発音された例もあったかもしれない。

あとひとつ、No.12 (BIN 8 144) を見てください。出土地はおそらくアッカド地域でしょう。このなかに30 (bur$_3$) iku eš$_2$-gar$_3$ 5^{giš}apin (Obv. I 1-2) というきれいなシュメール語表現があります。「計30ブルの（面積の）5犂耕作ユニット」という風に訳せると思います（1ブル：6.48ヘクタール)。同じテキストには、「犂」(^{giš}apin) につづいて「王」(lugal) という語が付されている同様な表現もあらわれる (šu 4 apin-lugal [Obv. I 15], šu ^{giš}apin-lugal [Obv. II 14])。そしてこのような表現をもつテキストがいくつも、帝国各地から出土しているのです。まちがいなくアッカド時代のある段階（ナラム・シン王時代？）には、帝国の直営耕地を一定の広さをもつユニットに分けて、それを国家が所有する耕牛によって耕作させるというシステムができあがります。これは、そのままウル第3王朝時代につながっていく施策なのです。何年か前、この中近東文化センターで開かれた国際シンポジウムで、私はウル第3王朝時代にそのような制度が存在したことを論証いたしました。王朝第2代の王シュルギが少なくとも南部バビロニアの耕地をアッカド時代と同じく6ブル単位のユニットに分けて、たとえば属州ギルスであれば600ユニットを、ウンマには100ユニットを分担させたのです。そのような制度の淵源は、まちがいなくアッカド時代にあることをNo.12は示しているのです。そのようなことがあれば、アッカド時代やウル第3王朝時代に各地で同じような行政記録が書かれ、また行政記録を書くための練習本として共通の語彙リストが採用されていたとしても不思議ではありません。

ところで、アッカドのような統一国家の時代の文書については、問題はさほど複雑ではない。問題は、都市国家エブラの文書と、はるか離れた南部メソポタミアのシュメール都市国家のテキストとの連関性なのです。南部メソポタミアとシリアという、恐るべき距離のことを考えてください。ここで、この問題を象徴的に示しているエブラ出土辞書テキストのことを考えてみましょう。エブラでは、南部メソポタミアで生まれたシュメール語彙リスト（たとえばEarly Dynastic Lu A）のほかに、シュメール語・エブラ語対訳辞典やシュメール起源とは証明できないシュメール語彙リストが確認できるのです。これは大変に重要な問題をはらんでいます。いっぽうで南部メソポタミアでは、シュメール語・アッカド語対訳辞典の出現は、現在のところ、シュメール人が政治的、民族的実体を失なう前2千年紀前半まで待たなければなりません。シュメール人とアッカド人は、メソポタミアでごく古い時期から共存していました。シュルパク（ファラ）やケシュ（？：アブ・サラビク）といった都市ではすでに都市国家時代後半からアッカド語がごく日常的に話されていたらしい。にもかかわらず、今のところ前2千年紀前半に書かれたシュメール語・アッカド語対訳辞書がもっとも古いのです。すでにアッカド時代にはそのようなテキストが存在していたはずだ、たとえばアガデやキシュなどからそのようなテキストが出土するはずだという意見もあります。あとひとつは、シュメール語にセム語訳を与える慣習は、より遠い地域たとえばエブラで始まり、これがメソポタミアに導入されたという可能性です。ざんねんながら私には、現在、この問題にたいしてちゃんとした回答を与えることができません。

さて第二の問題点は、エブラの語彙リストでも、シュメール語・エブラ語対訳辞典でも、さらに行政・経済文書のなかにでも、南部メソポタミアのテキストにはみられない「シュメール語」表現がおおく存在しているということなのです。これはどういうことなのでしょうか。いつかは、エブラの粘土板で見出されるのと同じ「シュメール語」が、南部メソポタミアのテキストでも確認できるかもしれない。いっぽう、エブラで発明された「シュメール語」風表現もおおく存在しているにちがいない。このことを、ウマ科動物についての表現を例にとって考えてみます。

お配りした資料に、メソポタミア南部で初期王朝期、アッカド時代、ウル第3王朝時代、それから古バビロニア時代に、ロバ、オナーゲル、ウマといったウマ科動物がどのようにテキストに記されていたかについて、私の考えを要約しておきました(本稿未掲載)。まず家畜ロバは、都市国家時代末にはANŠE.DUN.GI、そしてアッカド時代、ウル第3王朝時代（ただしプズリシュ・ダガンのみ）ではANŠE.LIBIRとよばれておりました。ウル第3王朝ではプズリシュ・ダガン以外ではロバはanšeとよばれ、のちこの呼称が一般的になります。いっぽうペルシア・オナーゲルはANŠE.BAR×AN、シリア・オナーゲルはanše-edin-na、そしてウル第3王朝時代になってはじめてメソポタミアに現れるウマは、当初はanše.si_2-si_2とよばれています。なお、それぞれのスメログラムの読みについては問題がおおいのでここでは立ちいることを避け、大文字のままで表記しておきます。ANŠE.BAR×ANというのは、「ウルのスタンダード」で戦車をひいている動物のことです。これはまちがいありません。なお、ポストゲイトさんたちは、この動物をオナーゲル（anše-edin-na）と家畜ロバ（ANŠE.DUN.GI.のちANŠE.LIBIR）のハイブリッドだといいます。私とポストゲイトさんたちのあいだの意見のちがいは大きく、妥協の余地はありません。

いっぽうエブラのテキストでは、行政・経済文書および語彙リストに、BAR×ANという表現がじつにしばしば見出されます。かつてペティナートさんはこれに「傭兵」という訳を与え、これを「オナーゲル」と訳したアーキさんとするどく対立しました。これが両者の関係を険悪化させた一因だったことは、ご存知の方もあるかもしれません。なおBAR×ANがウマ科の動物を指していることには疑いはありません。問題は、テキストにBAR×ANと並んでしばしばあらわれるIGIという動物なのです。アーキさんは、これがロバを指しているのではないかというのです。たしかにエブラのテキストでは、この語以外にロバを示す可能性のあるスメログラムは見出されません。じつは、南部メソポタミアではアッカド時代以降ANŠE.LIBIRというスメログラムが用いられますが、LIBIRという文字はIGIというサインと$ŠE_3$とが組み合わされてできているのです。アーキさんは、エブラではこのうちのIGIの部分だけが取りだされて、ロバが指示されたのだと考えています。わたしも、IGIがロバを指していると思います。ただしなぜ南部メソポタミアではANŠE.LIBIRで、エブラではIGIなのか。わたしは、両スメログラムには共通する読みがあるはずだと思っています。ところでエブラでロバがIGIとよばれているのだとすれば、事情は少しややこしくなる。じつは、同時代とされるメソポタミア都市国家時代末のテキストでは、ロバはまだANŠE.DUN.GIと書かれていて、ANŠE.LIBIR（ないしはANŠE.IGI＋$ŠE_3$）とされているのではない。この点では、エブラのテキスト年代をアッカド期とする旧説の方がまだ都合がよいのです。そこのところの事情は、まだよく分かりません。

いずれにせよ、ここで重要なことは、エブラの用語は、メソポタミアのそれの丸写しではないということなのです。ロバという人間にとってもっとも重要な動物についてさえ、二つの世界の語法は同一ではない。なによりも、BAR×ANやIGIを収録しているエブラの語彙リストは、メソポタミアには存在していません。また、ANŠE.BAR×ANやANŠE.LIBIRにアッカド語に訳を与えている南部メソポタミアの辞書テキストの原型と思われるようなものは、エブラではみつかっていない。

エブラは、はるか遠くの南部メソポタミアで生まれた文字文化を猛烈ないきおいで吸収しようとしました。場合によっては、南部メソポタミアのものを多少は変形してでも用いる。けれども、文字体そのものは大きく変えることはしなかった。エブラの書記は、それこそ必死でシュメール文字の書き取り練習をしたのでしょうね。もし私のところにエブラ出土のシュメール語彙リストが持ちこまれたら、これは南部メソポタミアから将来したと言ってしまうかもしれません。それほど文字体は共通しているのです。その点で、私は、エブラのIGIがメソポタミアの(ANŠE.)IGI＋$ŠE_3$の省略形だというアーキさんの考えには、まだ最終的に納得しているわけではありません。

VI

さて、前2千年紀のはじめに南部バビロニアで生まれるシュメール語・アッカド語対訳辞典については、伝播の範囲はさらに広がる。そして、この伝播は、それまでの行政・経済文書や語彙集の伝播とは、かなり様相を異にしている。むつかしいシュメール語文献（文学や宗教文書）を読みこなしたり、あるいは書いたりする必要が生まれたからです。じっさい、最初の対訳辞典が成立した前2千年紀前半のバビロニアでは、熱狂的と形容しても過言ではないほどの、シュメール語保存活動が存在していたのです。さて前2千年紀には、シュメール語辞典はボガズキョイで、エマルで、そしてラス・シャムラでも用いられていた。ボガズキョイのテキストではヒッタイト語のコメントも書き加えられる。前1千年紀前半のバビロニア地方で書かれたレキシカル・テキストは、これまで多く未公刊でしたが、これらも、今後は出版されていくでしょう。前1千年紀前半にいたるまでシュメール語が書きつづけられたのですから、そのような辞典テキストがたくさんのこっていたとしても、まったく不思議なことではないのです。前2千年紀のはじめ、シュメール語が死語になったからこそ、シュメール語テキ

ストは、さらに広い地域にまで広がったという逆説的な表現も可能であります。

今日お話ししたのは、行政・経済文書や語彙リストのシュメール語が、いかにメソポタミア各地に広く伝播していったかということでありました。ところでわれわれ日本人は、漢字をいかに使いこなすかということに、長い間たいへんなエネルギーを費してきました。いくども申しあげたように漢字とスメログラムの性格は、けっしていっしょではない。同じではないけれど、われわれには、たとえばエブラ、スサ、ヌジの書記たちがシュメール語を必死で勉強した、その態度がたいへんよく理解できます。今日の話は、メソポタミア各地の書記たちへのオマージュでもありました。これで終わります。ありがとうございました。

前川和也
京都大学人文科学研究所
Kazuya MAEKAWA
Institute for Research in Humanities,
Kyoto University